有能感の4類型と返礼行動の関連

——仮想型に注目して——

○澄川 采加¹ 稲垣 勉²

(¹鹿児島大学大学院教育学研究科 ²鹿児島大学教育学系)

Key words: 有能感の4類型, 返礼行動, 被援助時の感情

目 的

「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚（速水・木野・高木，2004）」と定義される仮想的有能感という概念がある。速水（2006）によれば、「他者軽視を通して生じる偽りのプライド」とも述べられており、測定には他者軽視傾向の程度を測る尺度（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan., 2004）が用いられる。ただし、その尺度で測定されるものは、文字通り「仮想」的な、根拠のない有能感であるかは自明ではなく、純粋な自信に基づいた有能感も混在している可能性がある。そこで速水・小平（2006）は、この他者軽視傾向に自尊感情を組み合わせた「有能感の4類型」を提唱した。このうち自尊感情が低く他者軽視傾向が高い「仮想型」は、本来の仮想的有能感の定義に最も近似したものになる（速水，2012）。この仮想型は、他の類型と比してネガティブな特徴を持つという報告がある（小平・小塩・速水，2007）。

有能感の4類型を扱う研究に一資料を加えることを目指して、本研究では有能感の4類型と被援助時の感情、返礼行動との関連を検討する。島（2012）によると、他者との親密さを求める一方で強い対人不信があり、それが親密さに対する不快感や親密な関係の回避につながる愛着スタイルである「恐れ型」と、有能感の4類型の「仮想型」は共通する部分があるという。また、箕浦・成田（2009）は、仮想型（および萎縮型）は、被受容感と被拒絶感の両方が高いことを示している。以上のことから、仮想型の特徴を持つ者は、他者から何らかの援助を受けた際に、相手に受容されたと思いきや反面、拒絶されることへの不安から、その好意を心から信じるのが容易でなく、心苦しさのような感情が生起するのではないだろうか。本研究では、シナリオ実験を用いて、親友から援助を受けた際に生起する感情や、後続の返礼行動について、特に仮想型に注目して検討する。

方 法

参加者 大学生・院生 176 名（男性 65 名，女性 109 名，不明 2 名（平均年齢 20.86 歳， $SD = 8.44$ ）を対象とした。

材料 (a) 自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982：4 件法 10 項目， $\alpha = .81$ ），(b) 他者軽視傾向尺度（速水，2006：5 件法 11 項目， $\alpha = .81$ ），(c) 被援助時の援助者に対する感情（一言他（2008）を参考に作成；以下，感情尺度：6 件法 10 項目， α 係数は後述），(d) 返礼の量（一言他，2008：6 件法単項目），(e) 返礼の種類（自由記述）を用いた。

手続き 質問紙形式でシナリオ実験を行った。シナリオは相川（1988）が作成したもののうち、心理的負債感の高くなりやすいものを選び、援助コスト高・低の 2 種類を使用した。参加者に調査への参加は任意であり、参加の有無により不利益を被ることはない旨を伝え、回答を求めた。

結 果 および 考 察

尺度の得点化 感情尺度は多くの項目に天井効果や床効果がみられたため、これらを除き、残った項目に対し主成分分析を行った結果、1 因子構造が得られた。この因子は「申し訳ない」「恥ずかしい」「驚き」の 3 項目で構成されており、

「静的ネガティブ感情（ $\alpha = .57$ ）」と命名し、合算平均得点を求めた。それ以外の尺度も、逆転項目を含むものはそれ処理した上で合算平均得点を求めた。

分散分析 自尊感情尺度得点（ $M = 2.58$ ， $SD = 0.48$ ）および他者軽視傾向尺度得点（ $M = 2.72$ ， $SD = 0.61$ ）の中央値（順に 2.55，2.73）を基準に折半し、参加者を有能感の 4 類型（全能型，自尊型，仮想型，萎縮型）に割り当てた（順に $n = 40, 42, 39, 39$ ）。なお、2 つの尺度間の相関は $r = -.12$ であり、有意でなかった。

有能感の 4 類型と援助コストの高低を独立変数、感情尺度と返礼の量をそれぞれ従属変数とした 2 要因分散分析を実施した。その結果、静的ネガティブ感情において、有能感の 4 類型の主効果が見られた（ $F(3, 152) = 3.04$ ， $p < .05$ ， $\eta^2_p = .06$ ）。Tukey の HSD 法による多重比較の結果、仮想型は他の類型よりも得点が有意に高い傾向が見られた（図 1）。返礼の量は援助コストの高低の主効果のみ有意であり（ $F(1, 151) = 8.07$ ， $p < .05$ ， $\eta^2_p = .05$ ），コストが高い方が返礼の量が多かった。

χ^2 検定 返礼の種類について、自由記述で得られた回答を「感謝の言葉」「安価な食べ物」「高価な食べ物」「安価な物」「高価な物」「食事を奢る」「その後の行動」「その他」の 8 カテゴリーに分類した。その上で、有能感の 4 類型と「その他」のカテゴリー以外の計 7 つのカテゴリーで χ^2 検定を行った結果、「食事を奢る」のカテゴリーと有能感の 4 類型の間に有意傾向の連関が示された（ $\chi^2(3) = 7.42$ ， $p = .06$ ）。残差分析の結果を表 1 に示した。他のカテゴリーに関しては、有能感の 4 類型と有意な連関は認められなかった（ $\chi^2_s \leq 4.54$ ）。

仮想型は他の類型よりも静的ネガティブ感情が喚起しやすい傾向にあることや「食事を奢る」という返礼行動を行う人が有意に多く、「食事を奢らない」人が有意に少ないという特徴が明らかになった。特に、静的ネガティブ感情については予想と一部一致した結果が得られた。

本研究の課題 今回、感情尺度の多くの項目が天井効果・床効果を示したため分析から除いた。今後はシナリオを調整するなどし、より広範な感情を収集して検討していきたい。

図 1 静的ネガティブ感情の分散分析の結果。

表 1 「食事を奢る」の残差分析の結果

	自尊型	全能型	仮想型	萎縮型
食事を奢らない	35	32	28*	37*
食事を奢る	7	8	11*	2*

* $p < .05$

(Ayaka SUMIGAWA, Tsutomu INAGAKI)